

1. 調査報告概要表

作成日平成21年10月20日

【評価実施概要】

事業所番号	1090200237
法人名	ケアサプライシステムズ株式会社
事業所名	グループホーム すみれ
所在地	群馬県高崎市新保町377 (電話) 027-370-1620
評価機関名	サービス評価センターはあとらんど
所在地	群馬県前橋市大渡町1-10-7群馬県公社総合ビル5階
訪問調査日	平成21年9月4日

【情報提供票より】(21年8月20日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 21 年 2 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	9人	常勤 5 人, 非常勤 3 人, 常勤換算 5.80 人	

(2) 建物概要

建物構造	軽量鉄骨造り	
	1 階建	1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	54,000 円	その他の経費(月額)	費500円/月、その他
敷金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有() 無	有りの場合 償却の有無	無
食材料費	朝食	200 円	昼食 300 円
	夕食	300 円	おやつ 60 円
	または1日当たり 円		

(4) 利用者の概要(8月20日現在)

利用者人数	9 名	男性	4 名	女性	5 名
要介護1	5 名	要介護2	3 名		
要介護3	1 名	要介護4	0 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 85 歳	最低	73 歳	最高	95 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	貝沢診療所・小野里歯科医院
---------	---------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

開設間もないホームである。環境はスーパーや保育園があり、川が流れ自然が感じられる。居室には群馬の温泉地の地名が付けられ、なじみがある。認知症対応型共同生活介護の制度に合致した利用者が入居している。職員と利用者は生活を共に支えあいながら、時の流れを感じ歴史を作っていくことができる。また、行事が多種にわたり、参加者も多い。理念は職員各自が考え提出し、その中でみんなで選んだ。したがって理念には各職員がかかわり、責任も生じるが、理念に沿ったケアの実践が期待できる。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	今回が始めての外部評価である。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	今回の外部評価は初回のため、管理者が素案を作成し、常勤職員に提案して、意見を盛り込み管理者が仕上げた。
重点項目③	運営推進会議は2ヶ月に1回開催されている。家族全員に参加依頼通知を出している。討議内容は管理者が運営推進会議の意義や必要性を説明することから始まり、ホームの状況等を議題としている。
	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	開設間もないために、近隣の人達には積極的に挨拶をして、ホームの存在を理解してもらえるように関わっている。散歩時に野菜をいただいたり、ホーム菜園の助言をしてもらっている。また、近隣保育園児の訪問や散歩時に園に寄ったりしている。ホーム主催の納涼祭に地域の方を招待し、模擬店やマジックショーを行い、地域住民と交流が図れるように努力している。

2. 調査報告書

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	理念は地域との「和」家族との「信」施設での「笑」を意識して盛り込んだ理念を職員全員で作り上げ、玄関・事務所・台所に掲げている。		
	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	管理者と職員は理念の浸透に励み、朝会の終了時に理念に触れ、共にケアの方向性を確認している。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	開設間もなために、近隣の人達には散歩時に挨拶をしたり、ホーム主催の納涼祭に招待し、模擬店やマジックショーを行い、地域住民と交流が図れるように努力している。自治会にはまだ加入していないが、区長や民生委員との交流は出来ている。保育園児との交流がある。	○	開設以来地域との交流を意識している。今後、自治会に加入して地域の一員となり、地域行事の参加や協力をしてほしい。地域住民とお互いに助け合うことが出来るような関係作りに努力してほしい。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	今回の外部評価は初回のため、管理者が素案を作成し、常勤職員に提案して、意見を盛り込み管理者が仕上げた。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は2ヶ月に1回開催されている。区長・民生委員・市職員・利用者家族・法人担当者・ホーム職員が参加している。管理者は初回に運営推進会議の意義を参加メンバーに説明している。全家族に参加依頼し、家族の参加(6人)が多い。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	ホーム・利用者の状況報告や運営推進会議の案内のため訪問している。		
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々に合わせた報告をしている	3カ月に1度「すみれ通信」を発行し、外出時やホーム内の行事の写真を載せて家族等へ報告している。会計報告や日々の暮らしぶりは文書で緊急時は電話で報告している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約時に相談窓口の設置を伝え、面会時にも苦情窓口の存在や意見等を聞くように努めている。意見があったときには運営に反映させている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	異動はまだ無いが、利用者への不安やダメージを最小限に抑えるよう努めている。管理者は職員の安定がサービスの安定と考え、職員の想いを聴くように努めている。異動の場合は、利用者・家族等に紹介し、経験等により研修させて、職員のケアの統一を図れるように配慮していく考えをもっている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修には3名が参加している。管理者は今後1日単位の研修にも出席させたいと考えている。職員は介護保険制度などの研修に参加している。研修参加者はミーティングで報告を行い、資料は全員で閲覧し共有化を図っている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は近隣のホームに開所の挨拶訪問をしているが、勉強会や相互訪問までには至っていない。今後は交流の機会作りから始めたいと考えている。	○	他ホームとの交流を図ることで、開所間もないホームの良さや足りないところに気づき、目指すサービス等を職員が持ち寄って、日ごろのケアに生かせるようなシステム作りを希望する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前に在宅や入所施設を訪問し、本人・家族等と聞き取りの面談を行いサービスに繋げている。入居後も職員が寄り添ったり、電話で家族の声を聞いてもらう等、理念のポイントである「笑」を基本にだんだんと利用者から笑顔が出てくるような支援を心掛けている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	職員は利用者と共に生活しながら、郷土料理や漬物、煮物やおひたしの作り方を教えてもらっている。家族から本人の得意なこと等を面会時に聞いて、日ごろの生活場面での関係作りに生かしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	食卓の席は決めず、利用者同士自然に希望の席に着席している。本人の日々の行動や発言・家族の意向を参考に、職員会議で共有し合い把握している。朝食やお風呂の声かけによる反応等でも真意を推し量って本人本位を検討している。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ミニカンファレンス用紙を用意し、随時検討できる体制を基に、本人や家族等から意向確認と個別のカンファレンスを行い、介護計画に反映させている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画の見直しは3ヶ月に1度と状態の変化に応じて随時実施している。ケアチェック表を作成し毎月の確認を行い、現状に即した新たな計画を作成している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	本人・家族等の希望で往診・買物の支援を行なっている。近隣保育園児との交流もある。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族等の意向を確認している。ホームの協力医をかかりつけ医にする場合は同意を得ている(5名)。かかりつけ医は認知症専門医ではない。本人希望のかかりつけ医の場合は家族に同行をお願いしている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	終末期についての指針がある。医療連携体制や系列病院とも連携している。看取りについては職員会議の場で話し合っている。管理者は利用者の状況等、緊急な案件ではないが今後も研修を重ねていきたいと思っている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員に対して管理者は、言葉かけや対応等に関して最低限タブーなことはしないように指導している。利用者を大声で呼んだり、プライバシーを損ねていると感じたときは、後で個別に注意している。職員は守秘義務の契約を法人と交わしている。記録等の個人情報の取り扱いに関しては秘密保持の徹底を図るよう努めている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のリズム等を尊重しながら、その人のペースで暮らしてもらっている。閉じこもってしまうときには支援している。趣味の刺繍や書道の経験者には道具を揃えている。今後は茶道の慰問を予定し、レクリエーション等でもその人のペースで過ごしてもらえるような対応をしていこうと管理者は考えている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
tok					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者は力量に応じて漬物をつけたり、調理や後片付け等を職員と一緒にやっている。利用者の好みを把握して職員が週単位で献立を作成している。利用者と職員は同じテーブルを囲み楽しく食事ができるよう支援している。選択メニューもやっている。近くのスーパーに職員と利用者が一緒に買物に出かけている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	基本的には午後から夕方にかけて個浴で1対1で週に2～3回入浴支援を行っている。足浴等もやっている。言葉かけ等の工夫により入浴できるよう支援している。	○	曜日や時間帯を職員の都合で設定せずに、一人ひとりの習慣や好みをよく聞いて、入浴の支援をしてほしい。
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	利用者の生活歴を把握し、役割にはお米とぎ・お盆拭き・テーブル拭き・モップかけがある。花見・買物・野菜作り・レクレーション・学生による傾聴ボランティア・介護相談員との会話等で楽しみごとや気晴らしの支援をしている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさず、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	現在は施錠しているために積極的に外出するようになっている。園庭やドライブ・買物に出かけている。		
(4)安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	居室に鍵はついていないが、過去に離苑があり、地域からの要望もあって玄関と門扉に施錠している。徐々に開錠したいと管理者は考えている。	○	職員は鍵をかけることの弊害を地域や家族に説明と理解をしてもらって、職員の見守りにより利用者の安全を確保しながら、日中は玄関に鍵をかけない、自由な暮らしの支援をしてほしい。
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	今年3月と7月に自主避難訓練を利用者と職員で実施している。運営推進会議で地域住民に災害時での協力を依頼している。職員間の緊急対応連絡網を作成している。今後は消防署の指導の下で、消火訓練等の実地訓練をする予定である。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスのとれた家庭料理を基本に提供している。食事量や水分量はチェック表に記載している。水分は摂取量の低い人でも1000ccは摂取している。職員は情報を共有しながら確保の支援をしている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は高い天井で広いベランダに出ることが出来る。キッチンには利用者が出入りしている。畳の部屋もある。テレビ・テーブル・椅子・観葉植物・利用者の作品や写真が飾られ、落ち着いた共用空間である。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の引き戸は安全面に配慮され利用者が引き易くなっている。また、くもりガラスがはめ込まれていて、中の様子がすぐには見えないように配慮されている。箆箆・テーブル・椅子・テレビ・写真等馴染みのあるものや好みものが持ち込まれており、本人が落ち着いて過ごせる場所となっているように見受けられた。		